看護小規模多機能型居宅介護における終末期のケアマネジメントの課題と工夫
-がんと非がんの利用者に関する類型を用いた実態調査-

国際医療福祉大学大学院　医療福祉学研究科　　保健医療学専攻　看護学分野　在宅看護学領域

〒107-8402　港区赤坂4－1－26　Tel＆Fax　03-5574-3890(内線11029)

研究代表者　　片平 伸子 ＜katahira-n@iuhw.ac.jp＞

【目的】

- 看護小規模多機能型居宅介護におけるがんと非がんの終末期のケアマネジメントの課題に直面した経験と対応する工夫の実施について明らかにすること。

【方法】

〇対象：介護サービス情報公表システム上で「ターミナルケア加算」算定を表明し、1年以上稼働している全国の看護小規模多機能型居宅介護施設に所属するケアマネジャー。

〇調査期間：2025年3月。

〇調査方法：WEBを用いたアンケート調査。

〇調査内容：

a)施設の概要

b)利用者の概要

c) 利用者の健康状態について

d)終末期のケアマネジメントについて

①終末期の始まりの時期と②死の前後の時期について、看多機における終末期のケアマネジメントの課題状況15項目と、これらに対応する工夫86項目　等

〇分析方法：収集した量的データは基本統計量を算出し、分析。

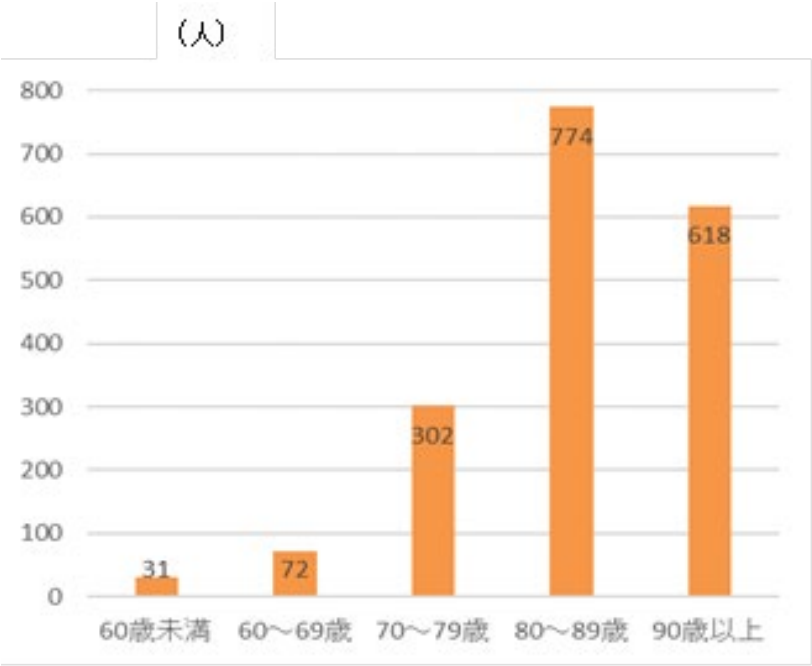
＊調査は国際医療福祉大学倫理審査委員会の承認を得て実施。

【結果】
1．施設概要

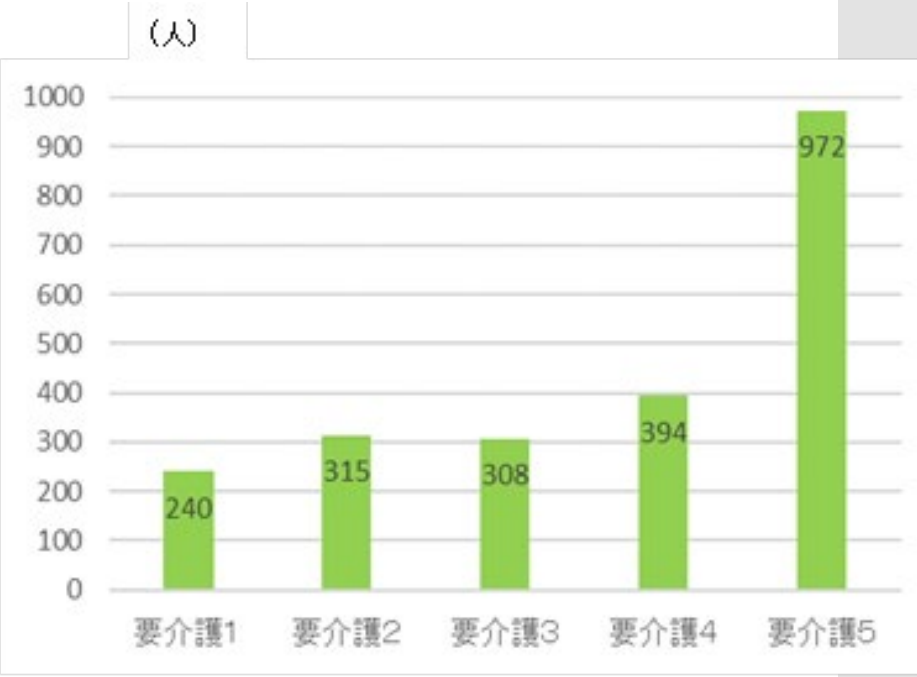
- ✓92施設から回答（回収率13.4%）。
- ✓施設の事業主体：営利法人が38施設(41.3%)、医療法人が21施設(22.8%)、社会福祉法人が19施設(20.7%)等でした。
- ✓併設施設は訪問看護ステーションが最も多く、73施設(79.3%)でした。
- ✓管理者の職種：看護師・保健師が最も多く50名、次いで介護福祉士が37名、ケアマネジャーが31名でした。
- ✓ケアマネジャーの保有資格は介護福祉士が最も多く50名、次いで社会福祉士が19名、看護師・保健師が17名でした。
- ✓施設の体制に関して取得している加算としては介護職員等処遇改善加算が最も多く90施設、次いで総合マネジメント体制強化加算85施設、サービス提供体制強化加算74施設(複数回答)でした。

【結果】
2. 利用者様概要

- ✓年代：80代が最も多く4割を占め、65歳未満の方は31名でした。
- ✓要介護度：要介護5が最も多く3割でした。
- ✓世帯形態：独居または日中独居の利用者様がいる施設は7割でした。



利用者様　年代



利用者様　要介護度

【結果】
3. 緊急対応・看取り

- ✓ 定期的に訪問診療を受けている利用者様がいる施設、過去1ヶ月間に緊急時訪問看護加算を算定した利用者様がいる施設はいずれも約8割でした。
- ✓ 過去1か月間に看取りを行った施設は71施設でした。

【結果】
4. 主な疾患・日常的に行う医療処置

- ✓ 定期的に訪問診療を受けている利用者様がいる施設、過去1ヶ月間に緊急時訪問看護加算を算定した利用者様がいる施設はいずれも約8割でした。
- ✓ 過去1か月間で看取りを行った施設は71施設でした。

表1　利用者様の主な疾患　（人）

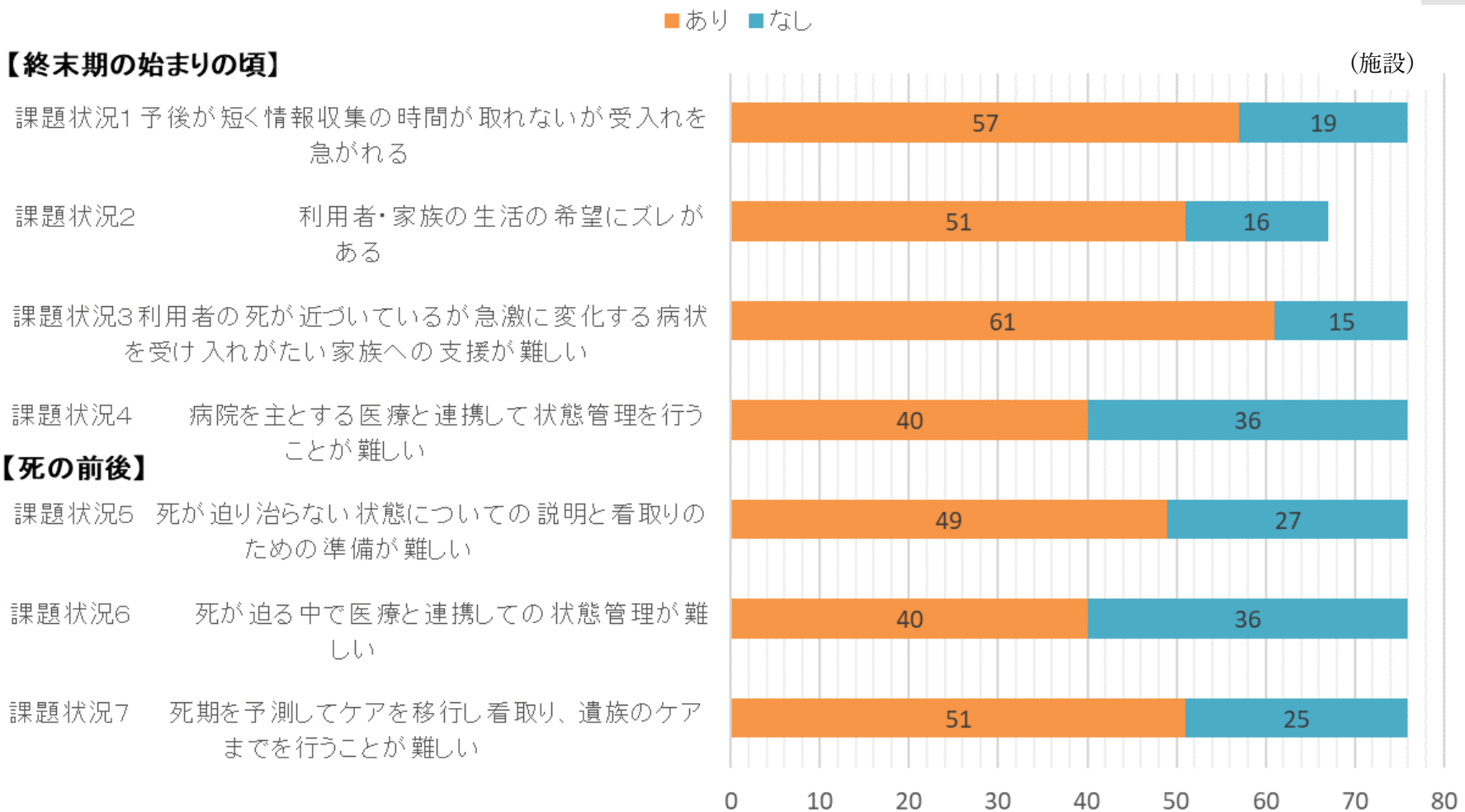
項目	n
認知症	768
脳血管障害	374
心疾患	341
糖尿病	271
がん	166
難病	134
肺炎	127

表2　日常的に行う医療処置　（人）

項目	n
浣腸・摘便	481
経管栄養	192
創傷・褥瘡処置	187
吸引	186
尿路カテーテル管理	163
インシュリン注射	110
血糖測定	107
酸素療法	88
点滴・注射	63
中心静脈栄養	22
人工呼吸器管理	5

【結果】5. がんの終末期の課題状況の経験

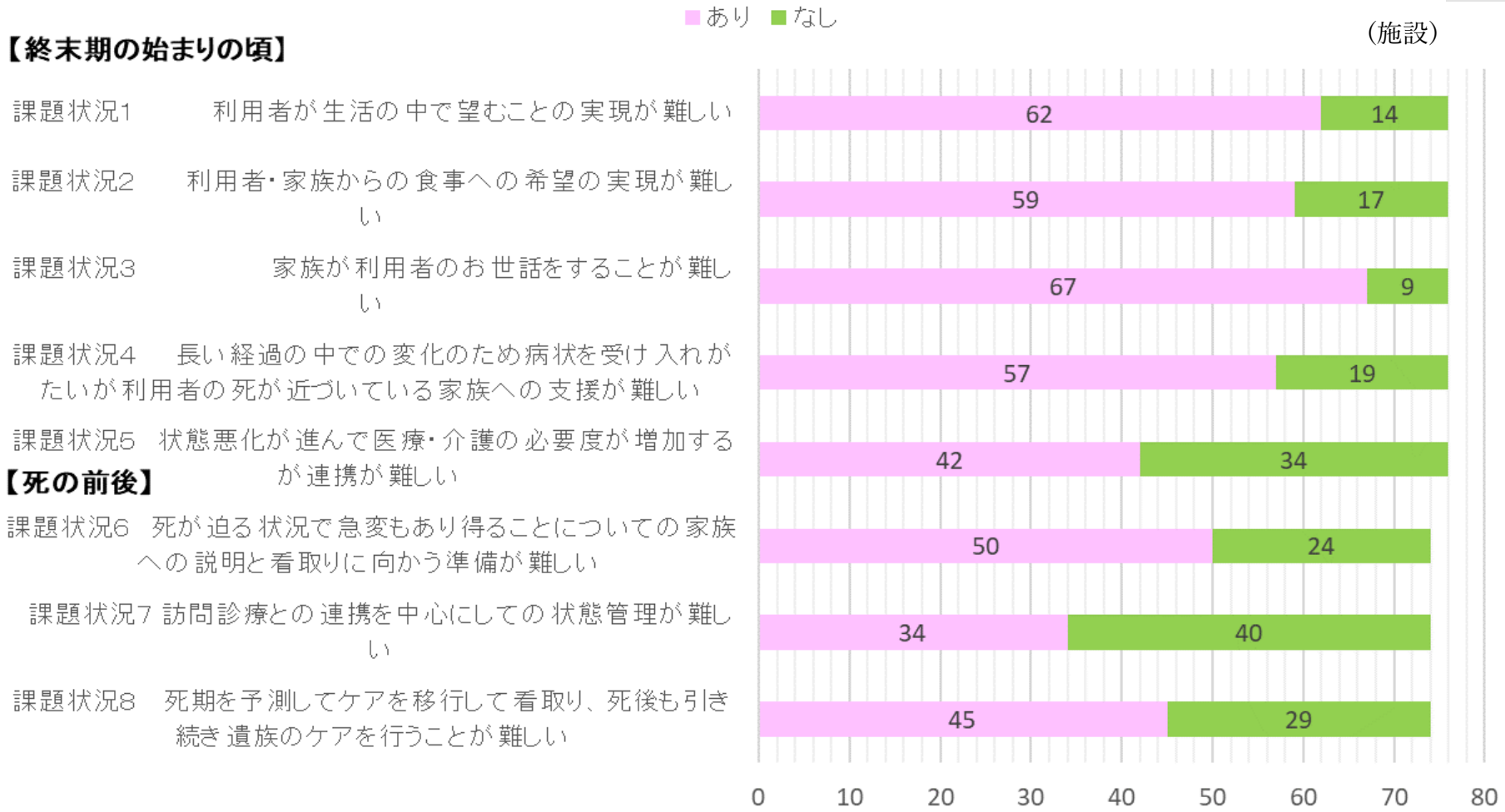
- ✓【終末期のはじまり】の時期のがんの課題状況では「利用者の死が近づいているが急激に変化する病状を受け入れがたい家族への支援が難しい」が61施設で最も多いという結果でした。
- ✓【死の前後】としては「「死期を予測してケアを移行し看取り、遺族のケアまでを行うことが難しい」が最も多く51施設でした。



【結果】6. 非がんの終末期の課題状況の経験

✓【終末期のはじまり】における非がんの課題状況としては「家族が利用者のお世話をすることが難しい」が最も多く67施設でした。

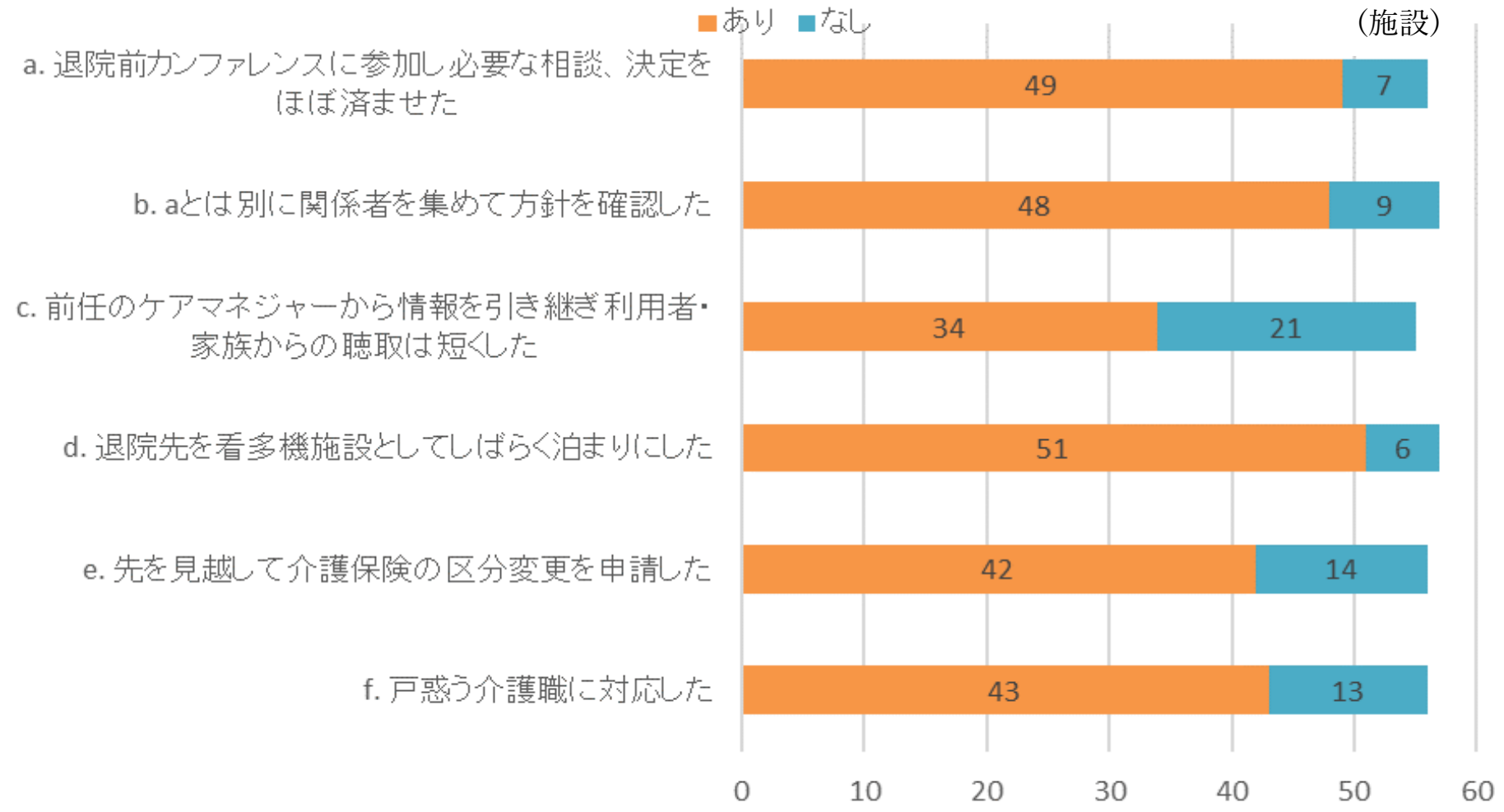
✓【死の前後】の時期としては「「死が迫る状況で急変もあり得ることについての家族への説明と看取りに向かう準備が難しい」が50施設で最も多いという結果でした。



【結果】
7. がんの終末期の始まり・課題状況に関する工夫

課題状況1

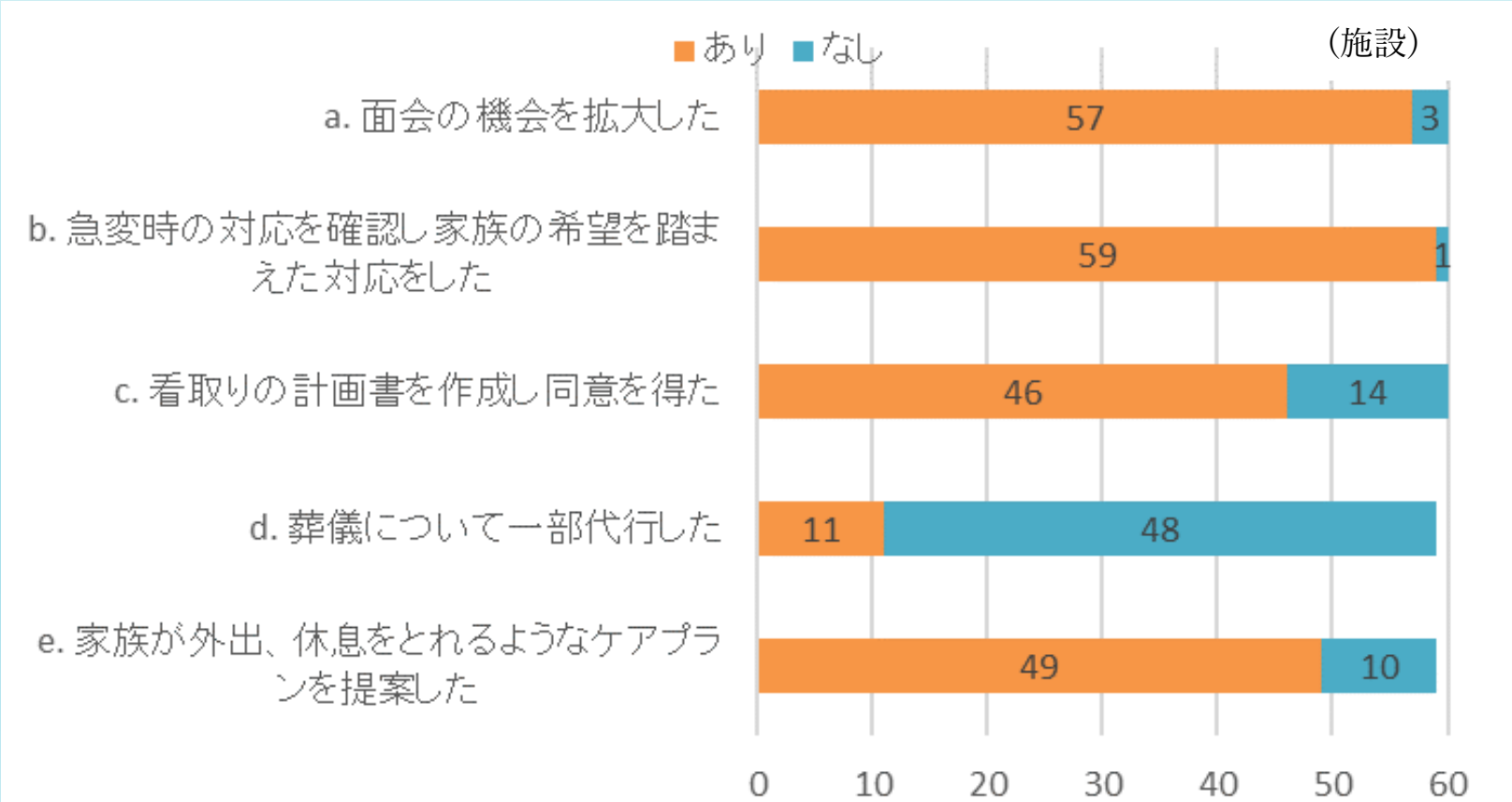
✓「課題状況１予後が短く情報収集の時間が取れないが受入れを急がれる」に関しては「退院先を看多機施設としてしばらく泊まりにした」等の工夫を行っていました。



【結果】
8. がんの終末期の始まり・課題状況に関する工夫

課題状況2・3

- ✓「課題状況2利用者・家族の生活の希望にズレがある」に関しては「利用者の希望に沿ってケアを行った」、「家族に事業所で行えることを事前に説明し了解を求めた」、「利用者と交流する時間をこころがけて取った」施設が多いという結果でした。
- ✓「課題状況3利用者の死が近づいているが急激に変化する病状を受入れがたい家族への支援が難しい」に関しては「「急変時の対応を確認し家族の希望を踏まえた対応をした」、「面会の機会を拡大した」等が実施されていました。



【結果】
9. がんの終末期の始まり・課題状況に関する工夫

課題状況4

- ✓「課題状況4病院を主とする医療と連携して状態管理を行うことが難しい」に関しては「訪問診療医をつけた」、「疼痛管理や事故予防を看護師を中心に行った」等が実施されていました。
- ✓この他の例として“早めに訪問看護に繋がることの必要性を周知”や“がんの診断を受ける前まで系列の通所介護を利用し、がんの発見から看多機へ移行した。”等の記述がありました。

【結果】
10. がんの死の前後・課題状況に関する工夫

課題状況5,6

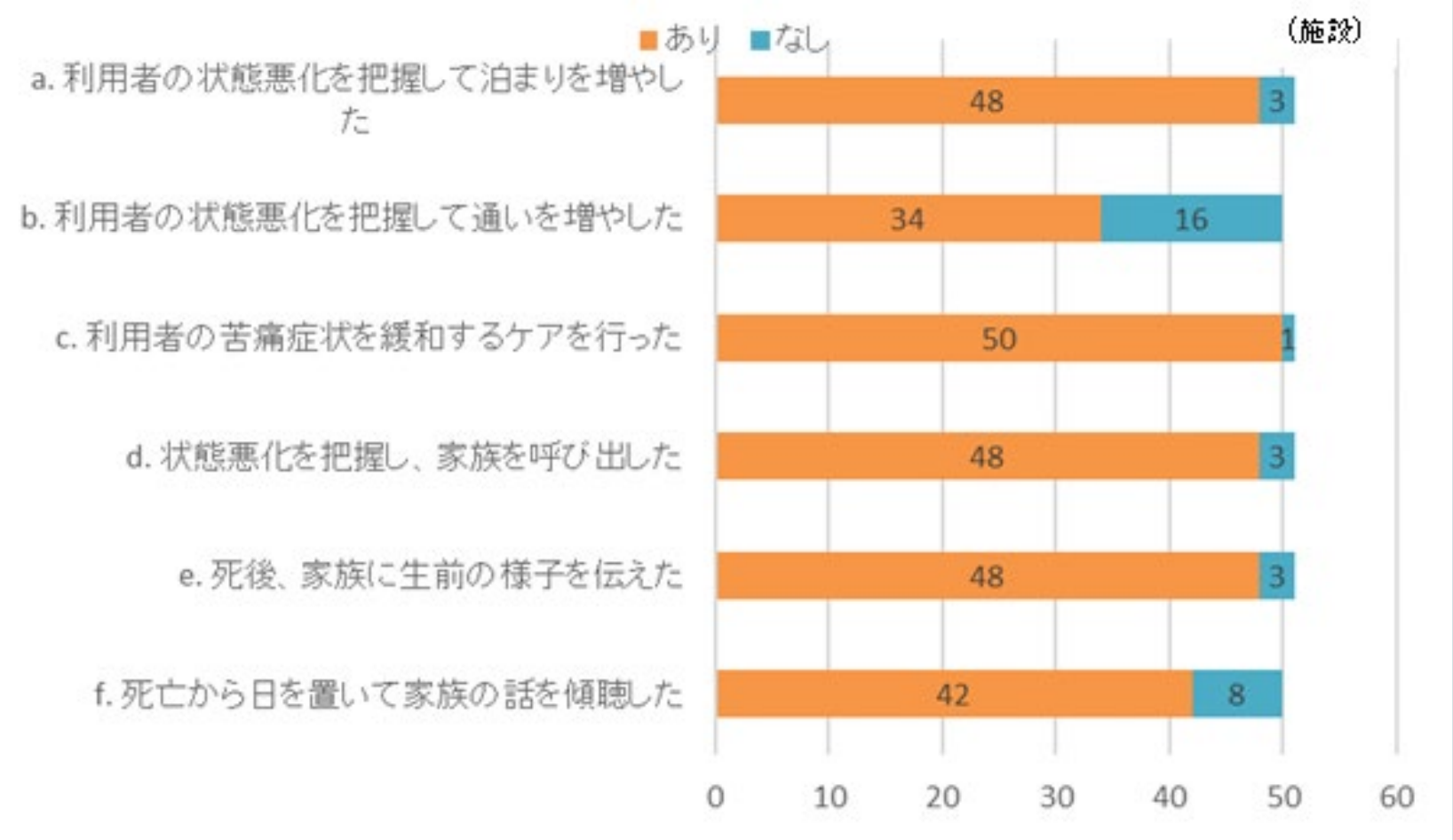
- ✓「課題状況5死が迫り治らない状態についての説明と看取りのための準備が難しい」に関しては「急変時の連絡について確認した」、「医師、看護師を含めて死が迫り治らない状態を家族に説明、要望に沿って対応した」、「面会制限を緩和し、関係者の面会を勧めた」等の活動を行っていました。

- ✓「課題状況6死が迫る中で医療と連携しての状態管理が難しい」に　関しては「訪問看護で医療処置を行った」、「医師の指示のもと頓服薬を利用して症状緩和を図った」等の対応を行っていました。

【結果】
11. がんの死の前後・課題状況に関する工夫

課題状況7

✓「課題状況7死期を予測してケアを移行し看取り、遺族のケアまでを行うことが難しい」に関しては「利用者の苦痛症状を緩和するケアを行った」、「状態悪化を把握し、家族を呼び出した」、「利用者の状態悪化を把握して泊まりを増やした」、「死後、家族に生前の様子を伝えた」等の活動を行っていました。その他として“死後に、という事はしないようにしている。存命のうちから日々の様子をこまめにお伝えできるようにしている”との工夫も記述されていました。

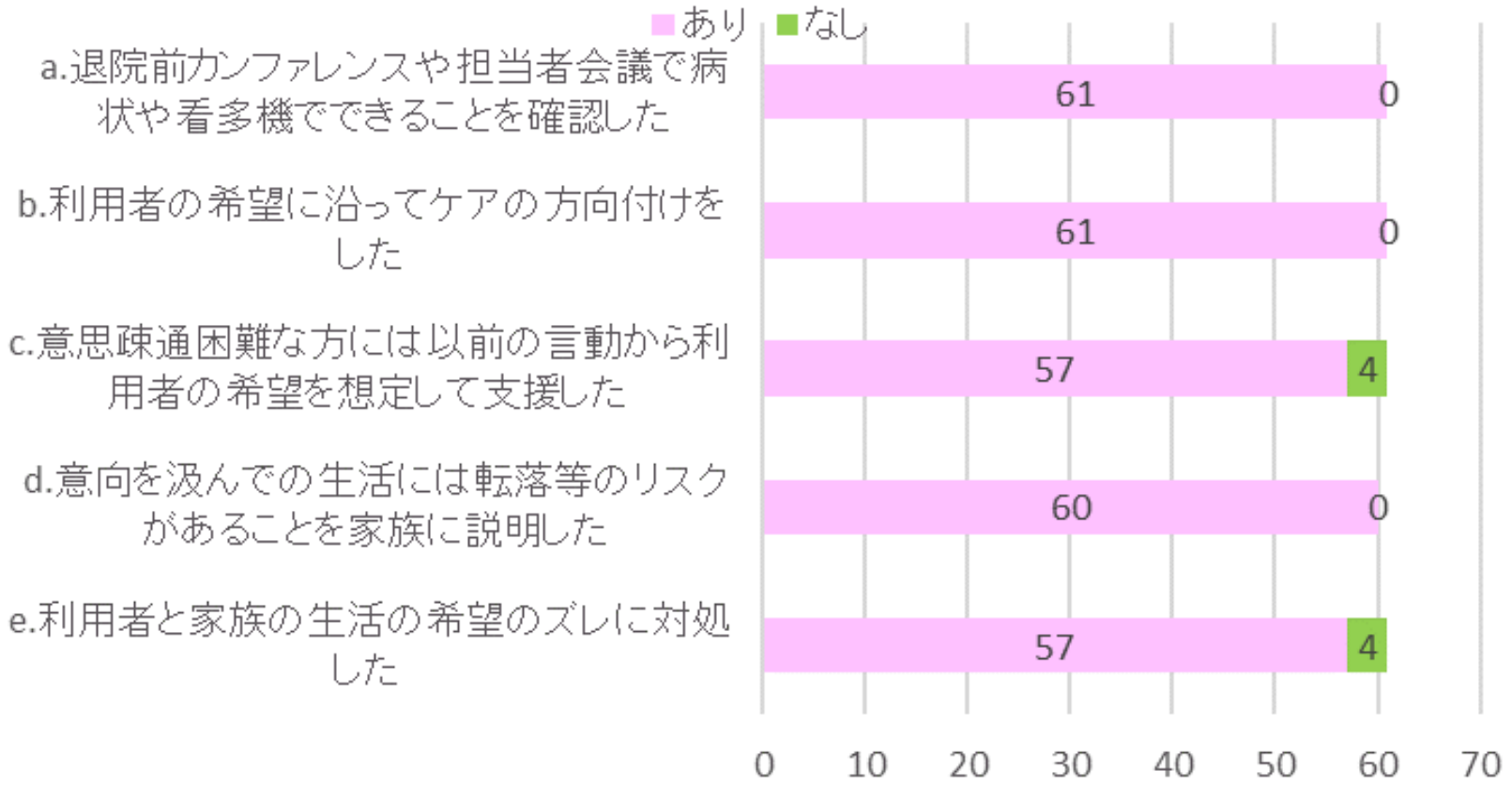


【結果】
12. 非がんの終末期の始まり・課題状況に関する工夫

課題状況1

✓「課題状況１利用者が生活の中で望むことの実現が難しい」については「退院前カンファレンスや担当者会議で病状や看多機でできることを確認した」、「利用者の希望に沿ってケアの方向付けをした」、「意向を汲んでの生活には転落等のリスクがあることを家族に説明した」等の活動を行っていました。自由記載として“ろうあの方を受け入れした時は、お客様が1人にならないように、職員全員で手話を覚えたりしました。”という記述がありました。

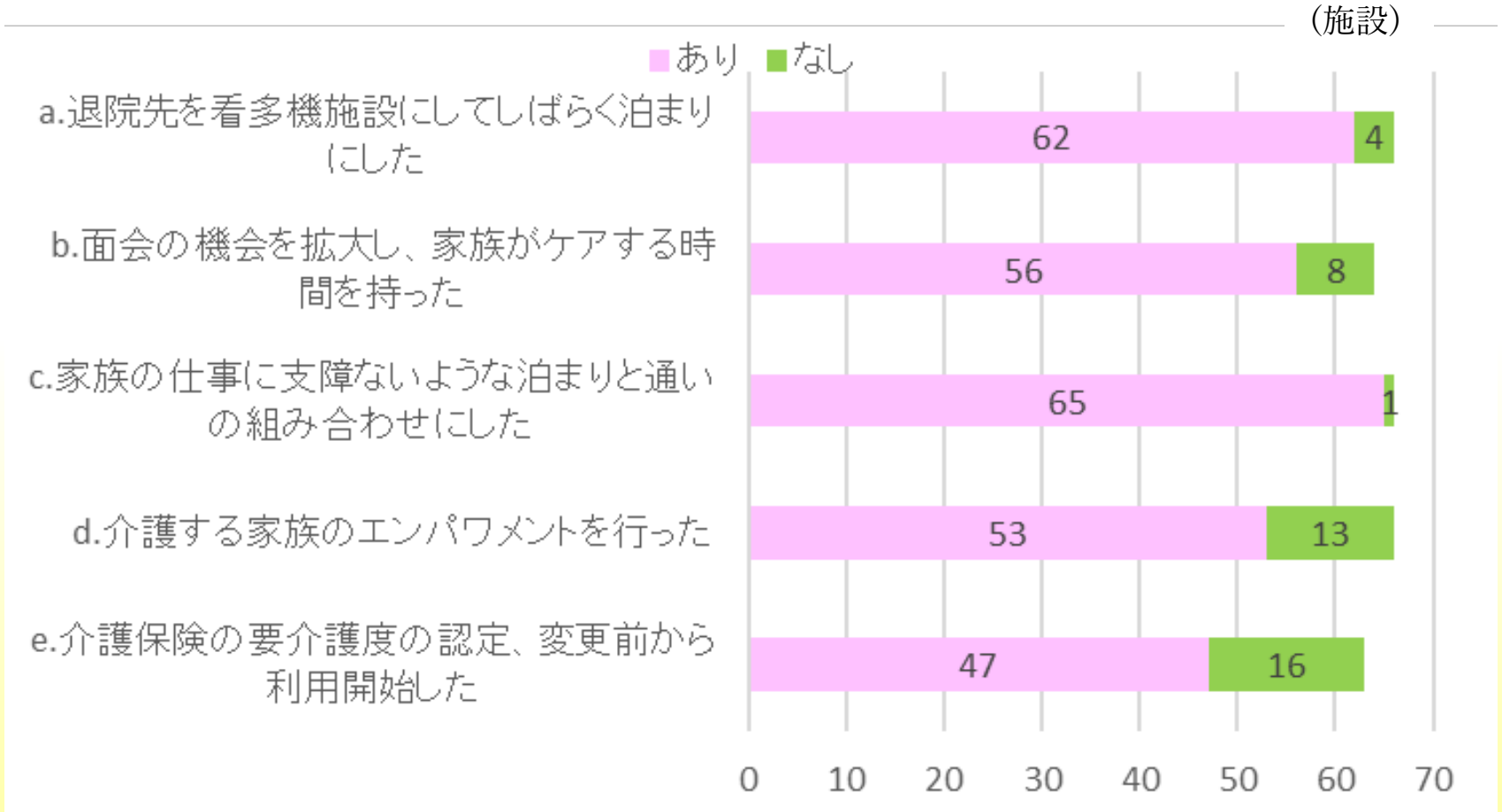
（施設）



【結果】
13. 非がんの終末期の始まり・課題状況に関する工夫

課題状況2,3

- ✓「課題状況2利用者・家族からの食事への希望の実現が難しい」については「誤嚥対策をしながら食事の支援をした」、「食事の形態を工夫し、家族へ指導した」等を行っていました。
- ✓「課題状況3家族が利用者のお世話をすることが難しい」については「家族の仕事に支障ないような泊まりと通いの組み合わせにした」、「退院先を看多機施設にしてしばらく泊まりにした」等の工夫が行われていました。



【結果】
14. 非がんの終末期の始まり・課題状況に関する工夫

課題状況4,5

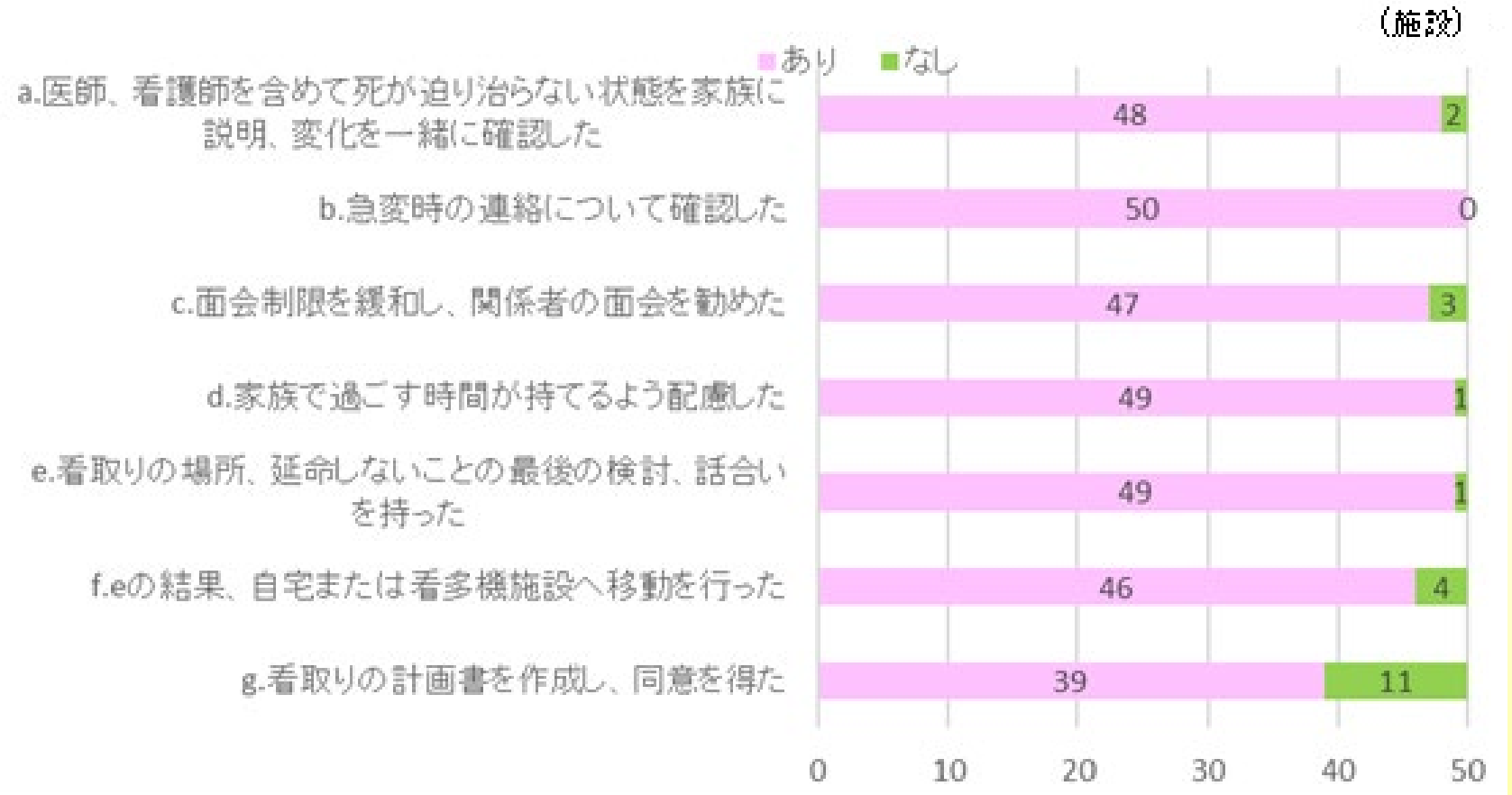
- ✓「課題状況４長い経過の中での変化のため病状を受け入れがたいが利用者の死が近づいている家族への支援が難しい」に関しては「根気よく家族の言葉を聞き、説明を繰り返した」、「医師、看護師を含めて家族にシビアな状況であることを説明した」等の活動を行っていました。

- ✓「課題状況５状態悪化が進んで医療・介護の必要度が増加するが連携が難しい」については「訪問診療医をつけた」、「医療処置・管理や事故予防を看護師を中心に行った」等の工夫がされていました。

【結果】
15. 非がんの
死の前後
課題状況に
関する工夫

課題状況6

✓「課題状況6死が迫る状況で急変もあり得ることについての家族への説明と看取りに向かう準備が難しい」については「急変時の連絡について確認した」、「家族で過ごす時間が持てるよう配慮した」、「看取りの場所、延命しないことの最後の検討、話合いを持った」等の活動が行われていました。



【結果】
16. 非がんの
死の前後
課題状況に関する工夫

課題状況7,8

- ✓「課題状況7訪問診療との連携を中心にしての状態管理が難しい」に関しては「医師の指示のもと服薬、処置、飲食を控えた」、「処置に家族の意向を取り入れた」等の活動が行われていました。

- ✓「課題状況8死期を予測してケアを移行して看取り、死後も引き続き遺族のケアを行うことが難しい」に関しては「利用者の苦痛症状を緩和するケアを行った」、「スタッフ間で急死があり得る状態であることを確認した」等の活動が行われていました。類型として提示された工夫以外に“家族や職員のグリーフケアを看護師中心に実施。ケアマネとして家族からの感謝の言葉などを職場に伝える”等の記載もありました。

【結果】
17. 非がんの
死の前後
課題状況に関する工夫

課題状況6,7,8

- ✓「課題状況6死が迫る状況で急変もあり得ることについての家族への説明と看取りに向かう準備が難しい」については「急変時の連絡について確認した」、「家族で過ごす時間が持てるよう配慮した」、「看取りの場所、延命しないことの最後の検討、話合いを持った」等の活動が行われていました。
- ✓「課題状況7訪問診療との連携を中心にしての状態管理が難しい」に関しては「医師の指示のもと服薬、処置、飲食を控えた」、「処置に家族の意向を取り入れた」等の活動が行われていました。
- ✓「課題状況8死期を予測してケアを移行して看取り、死後も引き続き遺族のケアを行うことが難しい」に関しては「利用者の苦痛症状を緩和するケアを行った」、「スタッフ間で急死があり得る状態であることを確認した」等の活動が行われていました。類型として提示された工夫以外に“家族や職員のグリーフケアを看護師中心に実施。ケアマネとして家族からの感謝の言葉などを職場に伝える”等の記載もありました。

【考察】

- ✓ 看護小規模多機能型居宅介護施設では定期的な受診や医療処置が必要な利用者が多く、また緊急対応を要する場面も少なくないことから、医療・看護のニーズが高い利用者像が示されました。
- ✓ 回答施設のおよそ8割が最近1カ月間で看取りを1件以上行っていることや、終末期のケアマネジメントの実践状況から、看護小規模多機能型居宅介護施設が終末期の高齢者が地域で暮らすことを支える重要な地域ケアの拠点となっていることが感じられます。
- ✓ 終末期に関してはがん・非がんのいずれにおいても家族支援に関する課題が多く、ご家族の仕事状況や要望を確認しながら死に向かう準備を進め、看多機ならではの在宅と施設利用の調整、サービスの組み合わせの工夫を行って対応している実態が記されています。
- ✓ こうした個々の施設で行っている工夫の共有が進むことや、看多機を利用したなじみのある地域での看取りの推進を目的とした公的な支援が今後望まれます。本研究成果の公表もその一助となれば幸いです。また、本報告をもとに貴事業所での終末期のケアマネジメントの現状や今後を見直す機会を持っていただければありがたく存じます。